

松原田中遺跡

まつばらたなかいせき

リユース 弥生人も道具の再使用をしていた！

今年度の松原田中遺跡調査で出土した遺物は、現在、洗浄・整理を進めています。その中には、弥生時代の石器も少なくありません。その中の一つに、石包丁（写真1・2）がありました。使われた石材は、遺跡周辺では産出しない結晶片岩と思われます。石包丁に適した石を、選んで製作したのでしょう。

石包丁は、稲の収穫時に、稲穂を刈り取るための道具で、ニヶ所にあけた孔に紐を通し、指にひっかけて使ったと考えられています。

しかし、今回出土したもののなかには、孔が三ヶ所あるもの（写真2）がありました。なぜでしょうか？よく観察すると石包丁の左側が欠けています。もともと1と2の孔に紐を通して使っていたのが、何らかの理由で欠損し、孔の位置的バランスが崩れて使いにくくなったので、孔を一つ追加して改めて再利用したのでしょう（孔3）。

一つの道具を大切に、長く使い続ける。私たちも、ぜひ見習いたいですね。



写真1 一般的な石包丁



写真2 破損品を再利用した石包丁（赤破線：復元部分）

鳥取西道路の遺跡を掘る！

第70号 2015年2月23日

今年度の常松菅田遺跡や大柵遺跡の調査では、古代の塩づくりに使われた土器が出土しました（写真）。これらの土器はいつから、どのように使われたのでしょうか？

また、鳥取県内ではどのような遺跡から出土しているのでしょうか…？



写真 今年度調査で出土した製塩土器
1 常松菅田遺跡 2~6 大柵遺跡

製塩土器のはなし

塩づくりに使われた土器を「製塩土器」と言います。製塩土器を使った塩づくりは、縄文時代後期（約 3,000 年前）から東日本で始まったようですが、鳥取県内では現在のところ弥生時代後期末（約 1,800 年前）の製塩土器が最も古いものようです。その後、奈良時代中ごろになると、塩づくりに鉄釜が登場するようになります。

さて、製塩土器を使った塩づくりは、4つの工程で行われていたようです（図1）。採鹹や煎熬には、内面を綺麗になでて海水が漏れないよう丁寧に作った製塩土器を利用しました。一方、焼塩には焼いたときに壊れることを前提にしたため、指の痕や布の痕がついたままの厚手で簡易なつくりのものを使いました（図2）。今年度調査で出土したのは、全て焼塩用と考えられる古代（奈良～平安時代）のもので、熱を受けて表面が変色したり、割れた状態で出土しました。

鳥取県内で古代の製塩土器が出土する遺跡は、役所やそれに関連した大きな集落（鳥取市 因幡国庁、岩吉遺跡など）がほとんどです。そのほかにも、古代の主要道路である「山陰道」の近くの遺跡（鹿野町 三王尻遺跡、湯梨浜町 寺戸第1遺跡など）で出土する例もあります。

今年度に製塩土器が出土した2つの遺跡の近くには、もしかしたら古代の山陰道や役所などがあるのかもしれませんが。

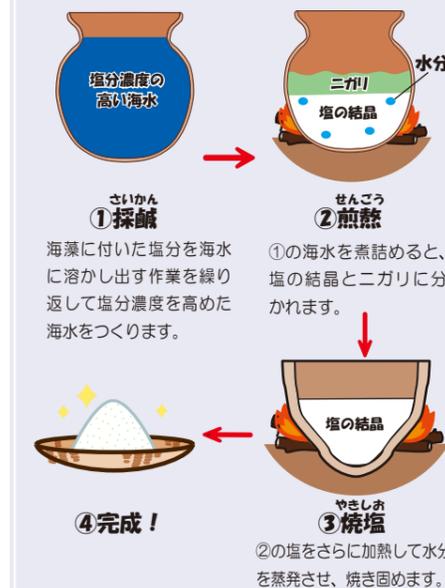


図1 製塩土器を使った塩づくりのイメージ

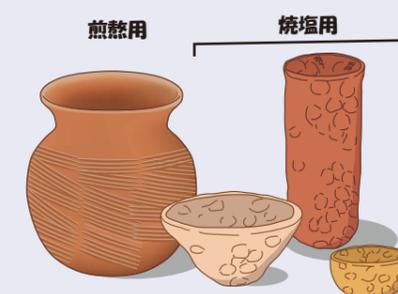
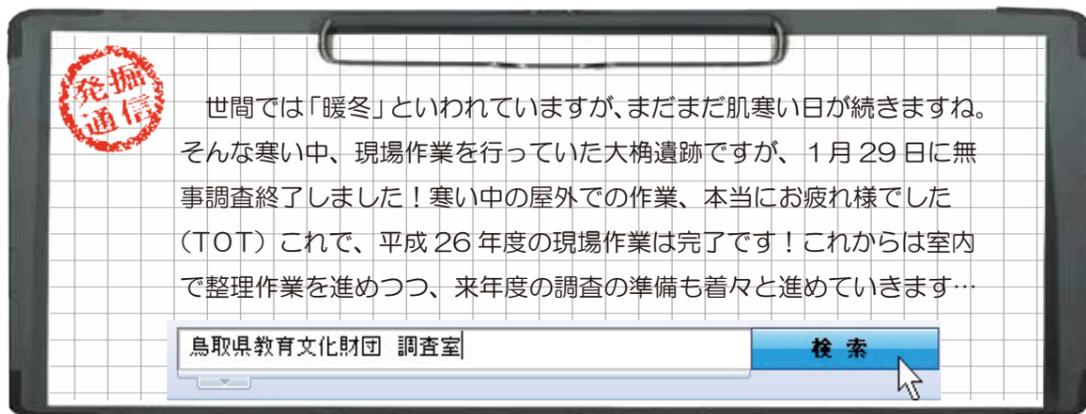


図2 製塩土器



（公財）鳥取県教育文化財団 調査室

〒680-1133 鳥取市源太 12 番地

TEL : 0857-51-7553 FAX : 0857-51-7550

メールアドレス : tottori-kyobun@kyobun.sakuratan.com

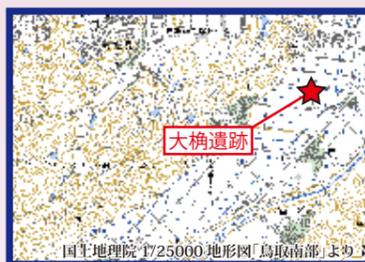
HP : http://kyo-bun.sakura.ne.jp/chosasitsu_new.htm



大楠遺跡

だいかくいせき

整理作業の現場から・・・



大楠遺跡の発掘調査も1月末で無事終了しました(T▽T)！
雪の降りしきる時期も乗り越え感無量ですが、発掘調査の成果をまとめるため、出土した遺物の整理作業は続きます。

そこで今回は、整理作業の成果のひとつをご紹介します。
古墳時代(約1,500年前)の川の跡から、土器や木製品とともにウマの頭の骨が出土しました(写真上)。壊れないように周りの土ごと、なんとか持ち帰ったのですが、スゴ腕の整理作業員さんがていねいに土を外していくことで、その形を詳しく観察することが出来るようになりました(写真下)！

その結果・・・
① 奥歯がほとんどすり減っていない若いウマであること
② 人間の八重歯にあたる犬歯がなく、メスであること
③ 下顎の骨の長さから肩までの高さが1mほどの小型馬であること
などが分かりました。このように、発掘が終わった後も室内の整理作業で新たな発見があるのです(▽▽)v。たくさんの遺物が出土した大楠遺跡、今後の発見にもご期待ください！



Before



After

常松大谷遺跡 & 常松菅田遺跡

見て！触って！大発見！？

常松大谷遺跡では、出土した土器を机に並べて観察し、いつごろ作られたものなのかを検討しています。その中の一つに、須恵器の高台付坏の破片があります。坏の底の内側と外側をよく見ると、ほかの土器とは違い、一部が少し黒くなっています(写真1・2)。また、土器の表面を触ってみると、少しつるつるしているところもあります。これはいったいなぜなのでしょう・・・？

黒くなっているのは墨が付着したため、つるつるしているのは墨を磨ることで表面が磨り減ったためと考えられます。これらの特徴から、この遺物は「転用硯」という、古代(奈良～平安時代)の硯だとわかりました。転用硯とは、専用の硯ではなく食器の破片などを硯として再利用したものです。

今回のように土器をじっくりと観察したり、触れたりする機会がなければ、このような発見はなかったかもしれません。今後の作業でも、過去の人々が残した小さな痕跡も見逃さないように、どんな遺物もよく観察しなければ・・・！そう強く感じさせてくれた発見でした。



写真1 高台付坏の破片(底の内側)



写真2 高台付坏の破片(底の外側)

高住宮ノ谷遺跡 & 高住牛輪谷遺跡

たかすみみやのたにいせき

たかすみうしわだにいせき



土器のお洗濯で初対面！

現在、高住宮ノ谷遺跡の調査で出土した遺物の整理作業を行っています。今回は整理作業の始めに行う遺物の洗浄についてお話しします。大量に持ち帰った土器の中から、新たな発見が・・・？あるかもしれません。

洗浄後、須恵器の文様のはっきり見えるようになりました。



①現場から持ち帰った土器は、土がついたままです。このままではどんな土器なのかよくわかりません。



②土器を傷つけないように、表面をこすらず、ブラシで軽く叩くように、慎重に土を洗い流します。



③すると、灰色(須恵器)や褐色(土師器)など、ようやく本来の姿が見えてきました。



④カゴに入れ、一点一点重ならないように置いて乾かします。

下坂本清合遺跡

しもさかもとせいごういせき

ハ～イ、動かないでね！

発掘調査報告書に載せるための、出土品の写真を撮っています。使っているのは大判カメラです(写真1)。少し前まで、卒業式や結婚式などで記念写真を撮るのに使われていたのと同じ種類のカメラです。写真2のように、頭に布をかぶり、逆さまに映る画面をルーペでのぞきながら、正



写真2 撮影風景

確にピントを合わせます。

使っているフィルムは4×5インチ判といって、郵便はがきくらいの大きさがあります。高画質なので、重要な文化財の記録には欠かせません。

大判カメラの操作はすべて手動で、手順が複雑なので、上手に撮るには慣れが必要です。最近ではデジカメも使っていて、高画質の写真が手軽に撮れるようになりましたが、良い写真になるかどうかは、やはりカメラマンの腕次第です。



写真1 大判カメラ

